

随想：総会の設計をめぐって

柿 崎 勉*

昭和52年度総会主宰を引受けることが決まった当座は事の重大性と困難性をただおぼろげに感じていただけだったが、その後、具体的に総会の設計に取り付いてみると大変むずかしい仕事であることがだんだんわかってきた。

まず総会の main event である学術大会の骨組として、従来おこなわれてきたような宿題、特講、シンポ、パネルといったいわば出し物と一般演題という pattern でいいか、さらにその場合でも前者のテーマとして何を選ぶべきか、後者の実施方法として何がいちばん適当かなどの問題に直面すると、空回りを繰返すばかりでなかなか決まらず、荏苒日を過しているうちに心中に焦燥と不安のかたまりがだんだん発育することになった。そしてついに、いったい総会とは何なのか、という反問が起こってきた。

総会とはその会のすべての会員が集まって何かをすることだ。その「何か」はわが泌尿器科学会としては定まっているに違いない。うかつにも小生はこの点を忘れていた。そこで日本泌尿器科学会会則というものを調べてみた。すると本会の目的は、「泌尿器科学および隣接科学の研究を助成し、斯学の進歩普及を促し、かつ会員相互の親睦を図ること」であり、この目的を達するための事業として「学術演説会の開催、雑誌の発行、優秀論文の表彰、その他の事業を行う」と出ている。また1年任期の会長の任務は、「学術大会を総理し、かつ総会の議長となる」ことであり、その学術大会は本会が毎年1回開くもので、会長主宰のもとに会員の研究業績の発表をおこなうものとなっている。これで総会の具体的な姿も、またその根本理念的なものもはっきりしたような気持になった。総会会長たる者はこれに従って行動すべきで、ゆめこれに背反するようなことがあってはならないと深く心に刻みつけた。

しかしこの理念を年1回の学術大会と総会を通じて

具現するには何を企画し実行すべきかということになるとふたたび迷いを生じてきた。ただ会長一個の考えで全く自由奔放に企画し実行することはできないことだけは明かだ。そして現在まで実施されてきた多数の総会はどういう形と内容であったかを考えてみた。

自分もすでに20数回総会には参加したが、各総会の姿・形は単に参加者の立場で見えてきて、主宰者の苦心労苦は理解できたが、理念的なものまでおし計ることはなかった。この点が総会主宰者となって初めて体験する難問だった。従来の総会を通覧すると基本的な骨組みとして前述のような一つの pattern ができている。これが本会の目的を達するための事業である学術演説会というものに最もよく当てはまるものかどうかは簡単に結論を出しえないだろうが、本会創立以来数十年をかけ、のべ数万におよぶ会員の叡知と協力によってしだいに形作られてきたものであり、また会員の知識や高い学問的視野への推進力として大きな貢献をしてきた歴史を忘れてはならないだろう。

時代が進むに従ってこの pattern は多少とも修飾され微少変化を重ねてきたが、それはいわば量的のもので質的变化というようなものではなく、基本的骨組みには変りはなかった。今後も当分のあいだ総会様式の根本的改変というようなことは起こりえないように思われる。ともあれここまで考えてくると、自分の主宰すべき総会の姿・形がおのずと決まってくるような感じが起こってくる。つまり従来の pattern でいいのだということだ。今度の総会のため評議員にアンケートでご意見をうかがったが、総会の骨組みに関する特別のご意見は一つもなく、大部分は会長一任という形のものであった。このこともこの pattern が会員一般に賛同支持されているものであることを示すものと考えてよからうと思われる。以上のようなまわりくどい理くつから生まれたのが日泌尿会誌8号に載った第2回予告のようなごく平凡なプログラムである。

* 信州大学教授（泌尿器科学）